

目次

九 全国諸方言アクセントの分岐

特殊音素の独立性10／アクセント体系の分岐10／第一類動詞・第一類形容詞の東京アクセント11／一音節名詞の東京アクセント13／三音節名詞の東京アクセント14／四音節名詞の東京アクセント15／五音節名詞の東京アクセント18／東京アクセントの統成的機能19／例えば福岡市アクセント20／鹿児島アクセント22／鹿児島アクセントにおける名詞の二型25／二型アクセントの祖形からの分岐28／一型アクセント29／複雑に分岐してしまったアクセント体系31

一〇 二音節を単位とする韻律

「韻律の単位34／韻律意識35／その単位は外形的性質を具有するか37／二音節を単位の基本とする韻律意識と『万葉集』の字余り39／意識の来由42／日本語韻文四拍子説45／現代日本語の音節46／母音の無声化52

一 音便の進行とその問題点

先発の音便とその成立の先後 54 / イ音便の定着と拗音の変質がもたらしたもの 57 / 後発音便の生起と各音便の変容 57 / マ・ナ行撥音便の変容 59 / バ行撥音便 60 / 形容詞イ音便・ウ音便 61 / 形容動詞・カリ活用形容詞・助動詞「タリ」「ナリ」の連体形 61 / 〈キ・ギ→イ〉にはずれる音便―「行ッテ」「歩ッテ」 63 / 複合動詞の前部要素に現れる音便と強調表現 65 / 音便の進行 66

二 広義の撥音便と狭義の撥音便―鼻母音と撥音

濁音の前の鼻母音 68 / 濁音の前の鼻音は、固有のものであるのか、新しく生まれたものであるのか 69 / 連濁と鼻音濁との相互関係 72 / 鼻母音と促音 73 / 撥音の成立 76 / 撥音 m と n 78 / 広義の音便も m・n に 80 / m と n との二種の撥音が生まれたわけ 82 / マ行動詞の音便のその後 83 / ㇿ 撥音は生まれなかった 86 / 漢字音の三内撥音韻尾の受け入れ 86 / 撥音 m・n の表記 88 / m と n の混同・合一化 88 / 濁音の前の鼻音の衰退 89 / ガ行音の音価 92

三 撥音便と濁音

清濁の別 94 / 古く語頭に濁音が立たなかったこと 95 / 語頭濁音語の新生 100 / 語頭ラ行音語

101 / 連濁生起の原因―先学の説明 102 / 連濁生起の原因を考察する方向 104 / 連濁の機能 106 / 多音節語の連濁 107 / 音位転倒 109

四 撥音便とハ行音

ハ行音の変遷 112 / 〈p ↓ ɸ〉変化の時期 114 / 〈p ↓ ɸ〉変化の原因 116 / バ行音とマ行音 117 / ハ行転呼音 119 / バ行転呼 〈b ↓ w〉 120 / 語頭における 〈p ↓ ɸ〉 123 / p 音の残存と新生 125 / 強調表現に現れる p 音 127 / 漢語に現れる p 音 128 / ニホン（日本）とニッポン 129 / バ行音の成立 131 / ɸ から h への変化 132 / 沖縄方言のハ行音 p 133

五 促音便と舌内入声音（t 入声音）

t 入声音 138 / 『天草版伊曾保物語』の t 入声音 139 / t 表記は促音を表す―後続音が濁音・清音である場合 141 / t 表記は促音を表す―後続音がその他の音である場合 144 / 促音表記二種の使い分け 146 / 『教行信証』から 148 / 濁音・ナマ行音・アヤワ行音が後続する促音と語末の促音との衰退 151 / 連声 153

一六 ウ音便・イ音便と長音

音便と長音―室町時代の長音156／才段長音開合の成立158／〈 $\text{--o:} \leftrightarrow \text{--i:}$ 〉〈 $\text{--o} \leftrightarrow \text{--e}$ 〉の揺れ159／才段長音開合の混同と音便161／江戸時代の長音―エ段長音とア段長音の成立162／漢字音の長音化163／沖縄方言の長音166

一七 イ音便の一般化による拗音の成立とエ段音・イ段音の口蓋化

ウ段開拗音168／合拗音の片寄った成立と衰退169／サ・ザ行音の音価とサ・ザ行拗音170／ヤ行の $\text{エ}(\text{e})$ とア行の $\text{エ}(\text{e})$ 、ワ行の $\text{ヲ}(\text{wo})$ とア行の $\text{オ}(\text{o})$ 171／ e と i の混同、 o と e の混同173／ $\text{e} \cdot \text{o}$ への回帰174／エ段音とイ段音の口蓋化175／エ段開拗音が生じなかったわけ176／エ段音の非口蓋化178／〈 $\text{aie} \rightarrow \text{--ai}$ 〉〈 $\text{--oie} \rightarrow \text{--oi}$ 〉〈 $\text{--aju} \rightarrow \text{--ai}$ 〉などの変化179／エ段音のイ段音への変化181／四つ仮名の混同182／一つ仮名(ズーズー弁)183

一八 沖縄方言の口蓋化と三母音化傾向―沖縄方言の史的位置

『おもろさうし』における口蓋化186／『おもろさうし』における「エ」と「イ」の揺れ188／『おもろさうし』における〈 $\text{--aCje} \rightarrow \text{--aCi}$ 〉〈 $\text{--oCje} \rightarrow \text{--oCi}$ 〉(Cは子音)などの変化189／沖縄方言の三母音化傾向190／沖縄方言の「キ」(木)「ウティ」(落)「ウリ」(降)などの問題190／有坂秀世氏の着想191／服部四郎氏の支持193／例外となる例に対する説明194／『お

もろさうし』に認められる、本土方言イ段音に対応するエ段音196／「キ」(木)が「チ」にならなかったわけ198／沖縄方言における「キ・ギ」の「チ・ジ」への変化201／沖縄方言の史的位置201

おわりに 203

あとがき 207

あとがき

本書の構想は、『室町時代語を遡りて見た日本語音韻史』（武蔵野書院 一九九三・六）を公刊した後、二〇〇一年の国語学会秋季大会（於福井市）において行った講演「日本語音韻史」にはじまる。それから更に歳月を経てようやくここに一つの形にすることができた。目指したところは、はじめに記したところで、日本語の歴史の動的な説明を構築することであった。突き詰めて考え抜いていないところも少なくないという苦い思いも残る。しかし、歴史に耳を傾け、まがりなりにも音便を軸にこの千年紀の日本語音韻史の骨組みだけ――まさに骨組みだけは私の視点から素描した。習作などと言って再度構想できるような状況にもはや私はいない。原稿を手放す今、本書が、日本語の歴史に思いを致す人々、特に若い読者をも惹き付ける力を持ったものになっていることを秘かに願う。そして、読者の、本書に厳しい検討を加えて下さることを願う。末筆ながら、先学の研究者に改めて心からなる敬意を表し、武蔵野書院主前田智彦氏に謝意を表して、筆を擱く。

二〇一五年二月一日

柳田 征司